

〈知的・自閉症・情緒障害教育〉

自己理解を深め社会へ参加する態度を育てる進路支援のあり方

— キャリア発達を促す教育を目指して —

那覇市立仲井真中学校教諭 蘇武 由貴子

I テーマ設定の理由

平成16年1月、文部科学省のキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議は、「学校の教育活動全体を通じて、児童生徒の発達段階に応じた組織的・系統的なキャリア教育の推進が必要」であること、また「キャリア発達を促す指導と進路決定のための指導とを、一連の流れとして系統的に調和をとって展開することが求められる」ことなど、キャリア教育の充実を考えるにあたり、必要な視点を報告している。

那覇・浦添地区中学校の知的障害学級在籍生徒のほとんどは特別支援学校高等部を受検し、入学する。彼らの大多数は、級友と切磋琢磨しながら、就労を目指し、毎日充実した学校生活を送っていることがうかがえる。一方、不登校・退学・問題行動など、入学後に深刻な問題が起きている現状もあり、その背景にある大きな理由の一つとして不本意入学はもとより、生徒自身の自己理解・自己受容が十分ではなかったのではないかと考えられる。また教師は、生徒の合格のみを優先するあまり、本来、生涯教育であるべきはずの進路指導が結果的に出口指導に陥ってはいなかっただろうか。進路とは、高校に行き就職することだけではない。彼らのその後のライフステージには、様々な生き方があり、自分らしい生き方の選択を自分自身がするというキャリア発達の視点を教師が十分に生徒に示してきただろうか、という反省がある。

例えば、私が出会った生徒の中に、通常の学級において学習に全くついていけないこと、テストの結果にショックを受けたこと、自分の言動が周りから笑われていることなどに自尊感情が傷つき、2年時から特別支援学級への入級の措置となった生徒がいた。この生徒は通常の学級に在籍している間も他者との違いを感じつつ、支援を受けないまま、学校生活を送ってきたことが考えられる。その一方で、担任とよく障害についての話をした生徒もいた。自分は知的に障害があり、他の人と違うところがあることや、落ち着きがなく、場を読めないことなども自分で理解していた。学力面では差がある通常の学級での学習であっても、非常に楽しみにしており、また級友との関わりも友好的であった。このことは、日頃から、個別の支援を受けながらできることを増やし、その小さなできることの積み重ねが、細やかな引き継ぎによって継続できたことで、肯定的な自己についての理解や自己受容につながってきたことによるものであったと考えられる。また、これらの事例は生徒自身が自己を知り、自己を受容することが、将来的に自分らしい生き方の選択を自ら行っていくために必要不可欠であるということを示唆していると考えられる。

障害がある生徒の進路を考える時に、就職だけにとどまらず、趣味や特技を生かした社会への参加・貢献、自立の方法、余暇の過ごし方など、キャリア発達を促す視点からアプローチすることが極めて重要である。さらに、生徒自身が自分らしい生き方の選択を自分で行っていくためには、自己を知り、自己受容することが不可欠である。これらのことを踏まえて生徒自身が進んで社会へ参加しようとする態度を保護者と連携を図り、共に育てたい。

以上のことから、生徒が自分のことをよく知り、様々な生き方を学習する、すなわちキャリア発達を促すことによって、進んで社会に参加しようとする態度が育つであろうと仮定し、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

知的障害がある生徒に向けた「進路支援プログラム」を作成し、生徒が自分の得意・不得意を知り将来の様々な生き方について学ぶことによって、社会に参加しようとする態度が育つであろう

II 研究内容

1 生徒の実態

生徒Aは、特別支援学級在籍の生徒である。スポーツが得意で、性格も優しく素直で明るい。一方、家や学校で嫌なことがあった時に、それらを思い出して、泣いたり、イライラしたりすることがよくあった。また、通常の学級の生徒と同じにして欲しいという気持ちがあり、教科担当教師の配慮や対応に対して、不満な気持ちを表すこともある。

本研究において、生徒の実態をより客観的・多面的に把握するため、以下の4つの資料を活用し、分析を行った。

(1) ICF (国際生活機能分類)

ICFとは、WHO（世界保健機関）が人間の生活機能と障害を記述する「共通言語」とするため2001年に発表した、国際生活機能分類（ICF, International Classification of Functioning, Disability and Health）のことである。

ICFでは、人間の生活機能は「心身機能・身体構造」「活動」「参加」の3つの要素で構成されており、それらの生活機能に支障がある状態を「障害」ととらえている。そして、生活機能と障害の状態は、健康状態や環境因子等と相互に影響し合うものと説明され、構成要素間の相互関係については、右の図のように示されている（図1）。

また、2009年に国立特別支援教育総合研究所が行った全国特別支援学校を対象とした悉皆調査において、ICFを活用した成果についての回答として、「教職員による幼児児童生徒に対する理解の仕方がより多面的になった」「教職員間の共通理解・連携がしやすくなった」「幼児児童生徒の目標設定がしやすくなった」（松村2009）などが多いことが報告されていることから、本研究において生徒のアセスメントにICFを活用することは有効であると考えられる。

ICFを活用して生徒の実態を把握しようとした場合、1400項目を超えるICFチェックリストの項目をそのまま用いるのは現実的ではないため、本研究では、「学習上又は生活上の困難」を把握するために、「精神機能」「学習の知識の応用」「一般的な課題と要求」「コミュニケーション」「コミュニティライフ・社会生活・市民生活」「支援と関係」を抜粋して、使用し、ICF関連図にまとめた（表1図2）。

ICFで見えてきたことは、生徒の生活環境は良く生徒自身の健康状態や精神状態も良いことである。レクリエーションやレジャー・スポーツなども大いに期待でき、また、保護者の理解により福祉サービスの受け入れも問題がないことである。

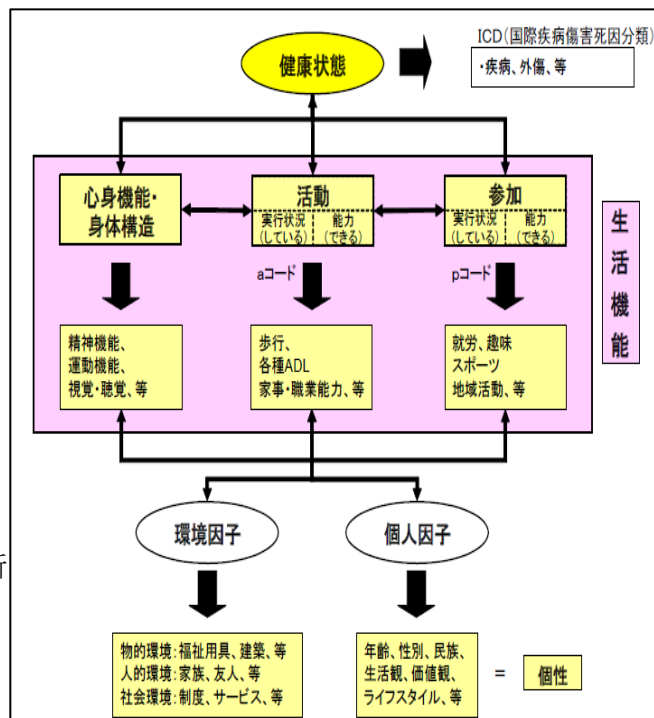


図1 構成要素間の相互作用

表1 ICFチェックリスト例

項目	実行状況	能力
d1 学習と知識の応用	0 問題なし	3 重度の困難
d110 注意して視ること	1 軽度の困難	0 問題なし
d115 注意して聞くこと	1 軽度の困難	1 軽度の困難
d140 読むことの学習	2 中等度の困難	2 中等度の困難
d145 書くことの学習	2 中等度の困難	2 中等度の困難
d150 計算の学習	3 重度の困難	3 重度の困難
d175 問題解決	4 完全な困難	4 完全な困難
d2 一般的な課題と要求	1 軽度の困難	2 中等度の困難
d210 単一課題の遂行	1 軽度の困難	2 中等度の困難
d220 複数課題の遂行	3 重度の困難	3 重度の困難
d3 コミュニケーション	1 軽度の困難	0 問題なし
d310 話し言葉の理解	1 軽度の困難	1 軽度の困難
d315 非言語的メッセージの理解	2 中等度の困難	2 中等度の困難
d330 話すこと	1 軽度の困難	1 軽度の困難
d335 非言語的メッセージの表出	2 中等度の困難	2 中等度の困難
d350 会話	1 軽度の困難	1 軽度の困難

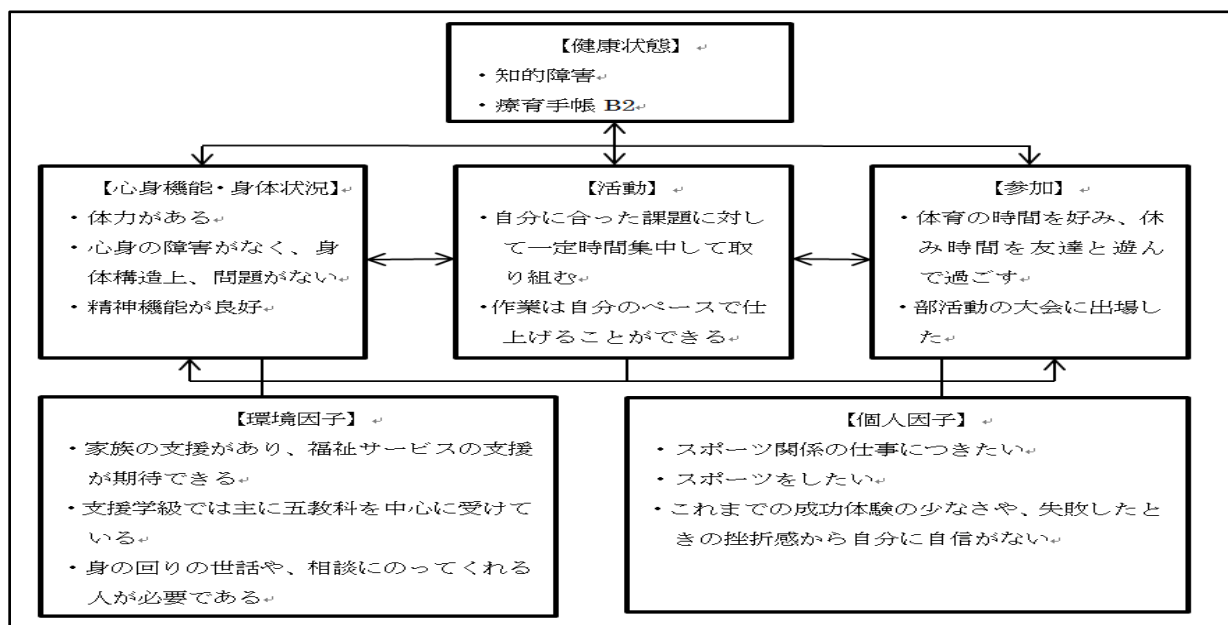


図2 ICF関連図から捉える生徒の実態

(2) 行動要素一覧

行動要素一覧とは、香川邦夫が「わかりやすい『自立活動』の領域の捉え方と実践」の中で、一人一人の児童生徒の実態把握に基づいて指導目標や内容を吟味する方法として作成したものである。学習指導要領の自立活動における6つの区分と26項目を基に再編成された行動要素項目は1000を超える。そのため本研究では、優先されるべき分野・領域を絞り込み、行動などの改善が期待できる項目を抜き出し、使用することとした(表2)。

行動要素一覧で分かったことは、生徒の達成できていることとして、理解してくれる人がいる、日々の生活の中に集中してできることがある、遊びなどで、友達が失敗しても大らかにうけとめる、自分の長所を知っている、ストレスの解消方法を知っている、等であった。達成してほしいこととして挙げられたのは、障害の理解と心身の調整、自己の障害への理解、障害を克服する態度と克服しようとする意欲の形成等であった。

(3) 自己肯定感と自己理解について

教育用語辞典(2003)では、自己肯定感を「自己自身の存在に対する認識として、自己の身体的な特徴や能力や性格等について肯定的に考えたり、感じたりする感情をさす」と定義されている。そして、自己肯定感は「他者とのかわりにおいて、自己の身体的な特徴や能力や性格について受容されていることを感じる事が重要である」と述べられている。また、東京都教職員研修センターは、「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるためのQ&A」の中で、保護者に理解され、認めてもらえると認識している子供ほど、自己肯定感が高い傾向にあると述べている。マズロー(Maslow, A. H.)は「人間性の心理学」の中で、自己実現の欲求のためには、その下の階層である自尊の欲求、所属の欲求がある程度満たされることが必要であるとしている。自尊の欲求は、周りから認めてもらいたいとする欲求である。また、所属の欲求は、集団帰属の欲求で、あたたかく迎えてくれる集団や個人を求める欲求である。これらのことから、自己肯定感は、この2つの欲求と密接な関係に

表2 行動要素一覧チェックリスト例

達成度	行動要素項目
	1 障害の理解と心身の調整
	(1) 自己の障害等の理解
	第3段階
	○11301 補助具や自助具を活用すれば行動が容易になることを知る。
	○11302 障害があるための行動制限にどのように対応したらいいかを大まかに知る。
	○11303 いろいろな種類の障害のある人がいることを知る。
○	○11304 障害は決して恥ずかしいことではないことを理解する。
	○11305 努力すれば活動の制限をなくしたり軽減したりできることを知る。
○	○11306 障害のない子どもたちとの交わりで自分の役割を考えて積極的に活動する。
	第4段階
	○11401 様々な活動を行う際、あらかじめ予測したり準備したりすべき点を知る。
○	○11402 様々な社会的活動に積極的に参加する態度を身に付ける。
	○11403 自力でできることと他人の助力が必要なことを区別して知る。
	○11404 活動制限を取り除くための対応の仕方(介助も含む)を具体的に知る。
○	○11405 自分の障害について詳しく知る。
	○11406 投棄による自己管理ができる。
●	○11407 自分を理解してくれる人のいることを知る。
	○11408 活動の制限も工夫すれば改善できることを具体的に知る。

あり、自己実現や社会参加へ向かうための大切な感情であると考え。また、社会参加へ向かうためには、自己肯定感を高める必要があり、そのためには、他者との関わり、保護者との関わりにおいて、自分は受容されていると感じ取ることが重要であると考えた。そこで、本研究では、自己肯定感について、自分自身の存在を長所だけではなく、短所も含めて肯定する感覚のことであると定義する。

生徒の自己理解・自己受容が進めば、自己肯定感の向上が見られると考えられ、自己理解の深化を図る目安として自己肯定感尺度を使用する。研究当初における生徒Aの自己肯定感尺度は、家庭内や仲間内の項目において、自己肯定感尺度が高いという結果であった。このことから、仲間内や家庭では受容されている安心感があることがうかがえる。一方、学校集団の中での自己肯定感尺度は0という結果であった(図3)。

厚生労働省は、「明日から使える！ キャリア教育～実践編」の中で、自己理解とは、「自分自身を分析することで様々な面から自己を確認し、客観視できるようになること」と述べている。また、自己理解の意義と目的として、「自分について理解する、自己概念を客観的に考える、よりよい進路設計ができるようにする」と述べている。

本研究では、自己理解とは、自分の好き嫌いや得意不得意、向き不向きや長所短所等、自分について必要なことに気付いているということとした。正しく、自分自身を理解することで、問題が起こった時に対処ができ、自尊感情や自己肯定感の低下を防ぐことができると考えられるため、自己理解を促すことは進路支援・キャリア教育を行う際に何より大切であると考え。自己理解を促す方法として、自己洞察、他者からの情報、チェックリスト等を使用する。

(4) パーソナルスキルチェック

パーソナルスキルチェックとは、キャリア発達の視点によるアセスメントであり、長期的に使用して児童生徒の変化を読み取ったり、発達段階を見通したりして、一貫した指導、発展的な指導へとつなげることを目的とするものである。

キャリア教育においては、育成すべき力として、基礎的・汎用的能力が示されている。しかし、障害のある児童生徒にとってはその実態を把握し、考慮することが必要である。そこで、本研究においては、佐藤（岩手県立総合教育センター特別支援教育室）が平成20年に提示した「知的障害のある児童生徒の勤労観・職業観のとらえと内容」において、生徒の実態を、「かかわる力」「楽しむ力」「もとめる力」「えがく力」「はたらく力」「生活する力」と、とらえたことから、それらを基に、生徒のキャリア発達の段階や発達課題を明らかにすることとした。

パーソナルスキルチェックにおいては、かかわる力、楽しむ力等に比べて、もとめる力、えがく力が低かった(図4)。えがく力・もとめる力は、対象生徒が日常生活の中で苦手と感じていることであり、これから進路支援を通して取り組みたい、伸ばしていくべき力ということが明らかになった。

2 キャリア教育と進路支援についての考え方

キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる

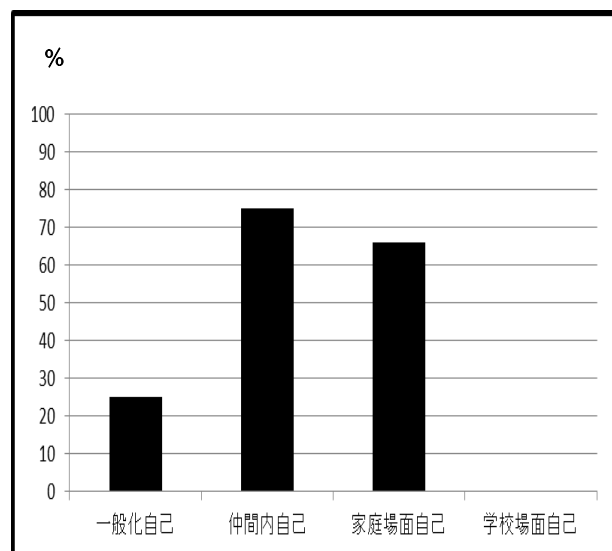


図3 自己肯定感尺度(10月)

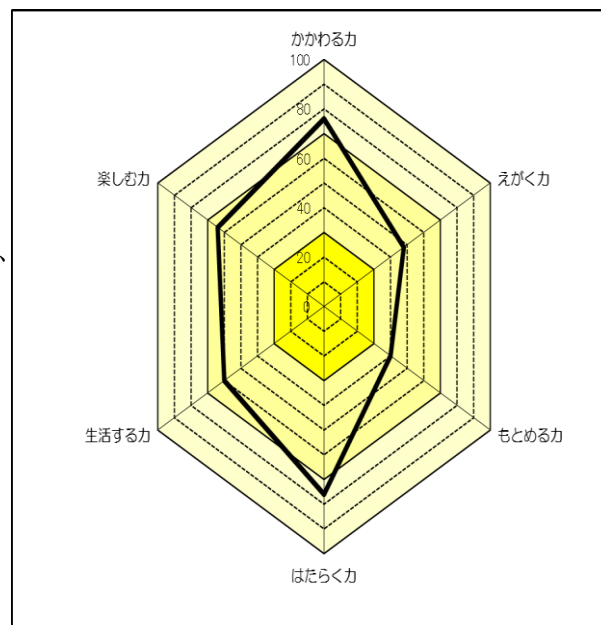


図4 パーソナルスキルチェック(10月)

ことを通して、キャリア発達を促す教育」である。さらに、キャリア発達とは「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」（平成23年1月 中教審答申）を指す。キャリア教育は、様々な教育活動を通して実践されるものであり、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。本研究での進路支援とは、進学や就職という近い目標を応援することはもちろん、卒業後、社会人として生きるということを見越して支援を行うことである。そこで、企業で働き続けたり、豊かな人生を送るためには、働く力だけではなく、暮らす力・楽しむ力も必要であることを教えたい(図5)。

また、本研究では、生徒が勤務形態や余暇活動の意義、社会人としての役割を知り、卒業後は自分で働き方や生き方を決めるという態度の育成を目指していく。また、どんな選択でも、楽しむことや社会参加はあきらめないでほしいということをキャリア発達を促す教育からアプローチすることで示したい(図6)。

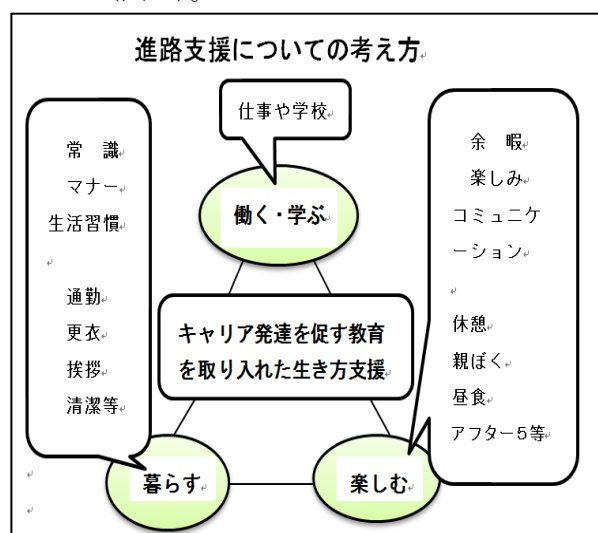


図5 働くために必要な3つの力
(渡邊 2003 を一部改変)

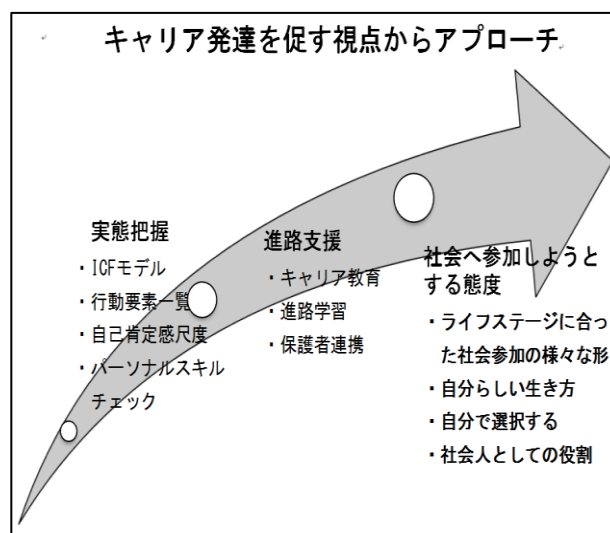


図6 進路支援の流れ

3 社会参加についての考え方

特別支援教育は、「障害のある幼児児童生徒の自立と社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導および必要な支援を行うもの」と「特別支援教育の推進について」（19 文科初発第125号）において定義されている。このことは、特別支援教育が目指す「自立と社会参加」のためには、キャリア教育が目指す「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てること」はとても重要なことであるといえる。

社会参加には、仕事だけではなく、趣味や特技を生かした活動の他にボランティア、地域の祭りや行事に参加する、コンテストや大会に出場するなど、市民運動や生涯教育等がある。障害の軽重に関わらず、何らかの形で社会の一員として、自分の役割を果たしていくことは、キャリア教育の視点から最も重要だと考える。本研究においては、軽度の知的障害のある生徒を対象とした研究であるため、社会参加を①働くこと②人と関わること③外で活動することの3つの視点で進めている。例えば、フルタイムで働きながら、週末は友達と遊ぶ。または、家族と地域のイベントに参加する。趣味やスポーツを仲間と楽しみ、大会や展示会、発表会に参加する。短時間勤務をしながら、友達と連絡を取り合い、どこかに行く計画を立てる。本を借りて図書館に行く。ラジオに投稿したり、自分のブログを開いたり、友達のブログを見てコメントを書くなど、自分に合った方法で進んで社会に参加することを指す。

III 研究の実際

1 指導計画

下村英男は「キャリア教育の心理学」の中で、キャリア教育の原則として、まず生徒本人の自己理

解をベースとしていくことが、不可欠の要素と述べている。このことから、自己理解を念頭におき、全5時間を計画・実践する(表3)。

表3 進路支援プログラム (全5時間)

	指導目標	指導内容	キャリア発達の段階
1時	「自分の得意な事を知ろう」 ・自分の得意な事を知る	自分を知ること① ・7つのパターンから、やりたいことに対して、どうしたらできるか考える ・自分の得意な事を考える ・周りの人の意見を聞く	自己理解・自己管理能力 ・自分の良い所を知っている ・周りの人が自分のことをどう思っているか、知ることができる
2時	「得意・不得意を知り、前向きに自分を理解しよう」 ・自分の苦手な事を知る ・苦手な事と向き合うことで、自分を前向きに理解する	自分を知ること② ・自分を前向きに理解するためには、どうしたらいいか考える ・苦手な事を考える ・人には、違いがあること。勉強できないのは、人と比べないことを確認する ・自分の苦手な事に対して、どうしたらいいか考える。 ・苦手な事を知り、向き合うことで、自分を前向きに理解することを学ぶ	自己理解・自己管理能力 ・自分の苦手な事を知ることができる ・自分のできることを、考えることができる
3時	「自分らしい豊かな生活をするために」 ・いろいろな働き方・生き方について知る ・豊かな生き方、自分らしい生き方について考える	いろいろな生き方① ・前向きになる練習 ・6つのケースから、いろいろな働き方、働かない生き方があることを知る ・自分らしい豊かな生き方についてイメージする	キャリアプランニング能力 ・好きなことや、やりたいことが分かっている ・夢や希望、生きがい、やりがいについて考えることができる
4時	「長く働き続けるにはどうしたらいいか」 ・働くことを続けるためには何が必要か考える ・働きながらも、生活を楽しむことが大事なことでであると理解する	いろいろな生き方② ・たけるのケースと3つの話から、長く働くために必要なことを考える ・自分なら、長く働くためにどうするか考える ・地域のスポーツ団体・障害者のスポーツ団体について知る	キャリアプランニング能力 ・働きたいという気持ちを持っている ・意思表示を考えることができる ・場に応じた挨拶・振る舞い等を考えることができる
5時	「自分年表を作成しよう」 ・これまでの自分を振り返ろう ・これからの自分をイメージしよう ・自分にできることを考えよう	将来設計 ・これまでの学習を考える ・これまでの自分を振り返り、これからの自分をイメージする ・「未来の自分」から「今の自分」にメッセージを書く	キャリアプランニング能力 ・将来の夢や職業へのあこがれについてイメージできる ・目標を実現するための主体的な計画を立てることができる

2 検証授業②

(1) 題材名「将来設計」

(2) 題材目標

① これまでの自分を振り返り、人との関わり、その時の自分の役割、成長してきた自分を知ることができる

② これからの自分をイメージすることで、自分の役割、成長している姿を確認することができる

③ なりたい自分に向かって、自分ができることを考えることができる

(3) 授業観

本テーマは「自己理解」「キャリア教育」「社会参加」の3つのキーワードからなる。授業全5回の内の5回目である本授業では、「社会参加」しようとする態度を育てたい。これまでの授業では、ICFの視点から自分のできること、または苦手なことにどう向き合うかを学んだ。次に、キャリア教育の視点から6つの事例を基にアプローチを試みて、「いろいろな働き方・生き方」について考え、自分らしい豊かな生活についてイメージすることができた。最後となる本時では、これまでの自分の生き方を振り返りながら、将来なりたい自分、こうありたい自分をイメージし、生徒自身の社会へ参加しようとする意欲や態度を育てていきたい。

学習の内容としては、進路学習 将来設計(キャリア領域 将来設計能力)を設定した。

授業では、自分年表を作成する。これまでの自分を振り返ったり、これからの自分をイメージしたりすることで、人との関わりや自分の役割を果たしながら成長していることを確認し、将来の夢や職業への憧れを広げていけるようにしたい。そして、「未来の自分」から「今の自分」への応援メッセージ・アドバイスを考えることで、なりたい自分へ向かうために、今の自分に必要なことに気づけるようにしたい。

(4) 本時の展開

時間	学習内容と生徒の活動	手立てや支援	準備するもの
10分 導入	○前時の振り返りをする ・パワーポイントを見る ○今日の学習内容を知る ①これまでの自分を振り返る ②これからの自分をイメージする ③未来の自分から今の自分へメッセージを書く	○振り返りをする中で、これまで学習してきたことを確認させ、本時の授業につなげる ・パソコンを使用し、視覚・聴覚両方から時系列で学習内容を示すことにより、生徒の振り返りの苦手さに配慮する ・例を示し、本時の学習のイメージを伝える	PC PP 教師の自分年表
30分 展開	○今日の目標を知る 自分年表を作成しながらこれまでの自分と、そして将来の自分が成長している姿を考え、今、自分ができることについて考える ○自分年表を作成する ・これまでの自分を振り返る ・ワークシート記入	○幼少期・学齢期とただ時間が過ぎていくのではなく、人に関わり、その時その時の自分の役割を果たしながら、成長してきた自分を感じ取れるように、「人との関わり」「その時の役割」「成長」をキーワードに、これまでとこれからをつないでいく (前半) 0才～中学生までを振り返る	絵カード ワークシート

さんの 自分年表 (前半)

0～6才 (赤ちゃん～幼稚園)	0才～ お父さん お母さん 3才～6才	周りにいた人 お父さん お母さん	どんな関わり おもてもらった。 お父さんが おいてくれた。	好きだったこと・できるようになったこと じてんしゃにのった。
7才～15才 (小学校～中学まで)	7才～12才 お父さん お母さん 13才～15才	周りにいた人 お父さん お母さん おばあさん おじいさん	どんな関わり おばあさんが そだててくれた。	楽しかったこと・がんばったこと 友だちといっしょにすどしたと。 カケリ かっどうをがんばった。 ぶかっを がんばった。 じかんを がんばった。
16才～18才 (高校生)	16才～18才	何をがんばっているか しよくぎょうを がんばっている。	何を楽しんでいるか 友だちとスポーツをいっしょに。	どんな成長をしているか たくましく なりたい。 じょうずになりたい。

・これからの自分をイメー

・人との関わり、その時の自分の役割・成長してきた

絵カード

	ジする	自分を確認する ・関わった人、自分を成長させてくれた人に対して、感謝の気持ちを持てるようにする (中半) 高校生から老後まで ・自分の役割・成長している姿を確認する (後半) 社会人から老後まで、なりたい自分をイメージさせる ・絵カードを合わせて、確認する ・自分の役割・成長している予定の自分を確認する ・生徒がなりたい自分をイメージすることが難しい場合は、教師がヒントとなるいくつかの絵カードを見	(社会人) 体力を使う仕事 技能を使う仕事 接客の仕事 家族というもの 一人でくつろいでいるもの、など (老後) 絵カード やさしい感じ 偉い感じ おもしろい感じ
	さんの 自分年表 (後半) どんな仕事があるか 高校卒業 (就職) きょうし、かいぎ、はいたつ、ゆうびん、スポーツのざい、けいさつか、しょうぼうし、スーパーのていじん 何になりたいか スポーツのざいしゅ、りょうしんのうぎょう 何になれるか スポーツせんしゅ 18才～定年まで (社会人) 働き方・仕事 フルタイムスポーツざいしゅ 生き方・楽しみ 友だちと生活したい、 成長したいこと 生活をきちんとしている、けんこんする。 定年後 60～ 楽しみ 老後60～ 生き方(どんな生活) よともだちとおそんでいる、 外にでていつも何かをさせている人、自分のがくをもっている。		
10分 まとめ	○カード記入 ・なりたい自分になるために、今、自分にできることを考える ・「未来の自分」から「今の自分」に応援メッセージ・アドバイスを考える ・カード確認	・絵カード・生き方・楽しみ方を確認する ○「未来の自分」から「今の自分」に対して、応援・アドバイスを考えることにより、今の自分に何が必要か客観的に自分を見つめることをねらう ・具体的に記入できるように、アドバイスする 「○○なことは、続けるといいね」 「失敗したり、うまくいかない時は○○するといいよ」 「○○にもチャレンジしてみよう」 「○○○な所が心配だから、○○するといいよ」 ・声に出して読み上げ、確認する ※ なりたい自分をイメージし続けること、あきらめないこと、どんな時でも楽しむことを忘れないことを確認したい	カード

(5) 検証

社会参加をしたいという気持ちになれたかということをも4つの項目で検証する。

項目① 人との関わりの中で自分の役割が分かり、成長してきた自分を知ることができ、感謝の気持ちを持つことができたか、について

幼少期から中学までを振り返る場面において、「お兄ちゃんになった」「おばあちゃんが

来てくれた」「先輩になった」と答え、人との関わりの中で自分の役割が分かり、成長してきた自分を知ることができ、感謝の気持ちを持つことができていた。

項目② なりたい自分・なれる自分のイメージができているか、について

いくつか仕事を挙げ、なりたい自分をイメージでき、なれる仕事として、漁師やスポーツ選手という言葉がでてきたことから、なれる自分のイメージもできていた。

項目③ 趣味や特技を生かして、人と関わろうとする言葉がでてきたか、について

「老後は、スポーツやボランティアをしている」とイメージをしたことから、趣味や特技を生かして、人と関わろうとする気持ちが育っていると考えられる。

項目④ なりたい自分になるために、今、自分に何が必要か客観的に自分を見つめ直す言葉がでてきたか、について

「気が弱いところが心配だから、もっと自信をもとう」「体を動かすことは続けよう」等、なりたい自分になるために、今の自分に何が必要か客観的に自分を見つめ直す言葉が出てきた。以上のことから、本授業において、自分を振り返り、これからの自分をイメージして、なりたい自分に向かって、今できることを考えた結果、社会に参加したいという気持ちになれたということが検証されたと考えられる。

3 検証後の考察

研究仮説「知的障害がある生徒に向けた進路支援プログラムを作成し、生徒が自分の得意・不得意を知り、将来の様々な生き方について学ぶことによって、社会に参加しようとする態度が育つであろう」に対する検証を、研究授業と検証授業の感想とワークシート、授業中の生徒の様子から行った。

(1) 自己肯定感の変容について

自己肯定感尺度を研究当初と比較すると、一般化・家庭場面・学校場面での変容が認められた(図7)。

一般化自己では、自己肯定感尺度が25%から58%へ上がった。「スポーツができる」「好かれている」と、自分の良い所が分かっている、なかなか言語化する機会はない。しかし、自己理解を促す取り組みにより、「部活動や体育の時間等、みんなと協力してうまくできる」「みんなが、遊ぼうと言ってくれたり、何かあった時は、面倒をみてくれる人がいるから、好かれている」と具体的に表現することができるようになることで、改めて自分の良い所を確認することができたことが上がった要因と考えられる。

学校場面自己では、0から33%へ上がった。学校の級友、先生方、卒業した先輩が普段感じている生徒の良い所について伝えたことが、「とてもうれしい」「合っている」「やっぱり」と、自分のことを前向きに理解することにつながったと考えられる(図8)。

また、一般化自己、学校場面自己においての自己肯定感尺度の数値が上がったもう一つの要因は、自分の良さを認めて、苦手な事に対処する方法を学んだことによるものだと考えられる。「苦手なこと」について考える場面において、生徒の感情に共感を示しつつ、慎重に「皆と同じようにできないのは、あなたのせいではないよ」「良い所がこんなにあるけど、苦手な所もあるから、こういう風に対処しよう」と示したことから、生徒が自分の苦手なことを受け入れてくれたようにうかがえた。そこで、不安やつらい気持ちが緩和されたと考えられる。

家庭場面自己では、66%から100%へ上がった。生徒がこれまでの家族との関わりを通して、助けてもらったことを振り返ることができたこと、そして、家族から生徒の良い所、頑張っていることをメッセージで伝えた所、「こんなこと言ってくれてたんだ」とうれしい気持ちを持てたこと等が要因として挙げられる。また、担任と保護者で連絡を取り合い、授業の目的・方法などを伝え、保

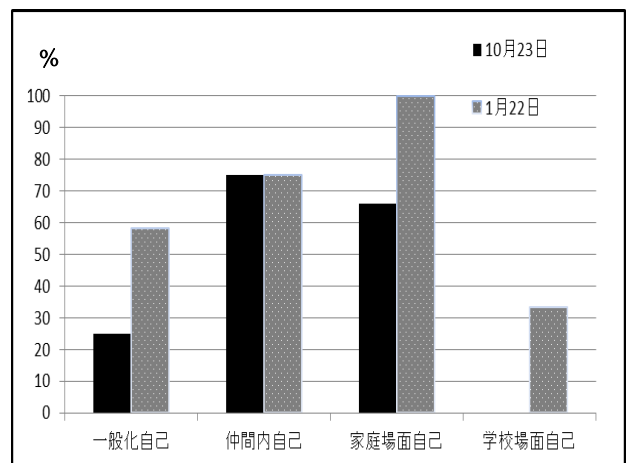


図7 自己肯定感尺度の変化

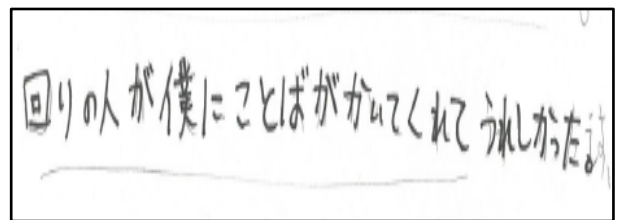


図8 生徒の感想

護者の協力も得られたことから、家庭内での対応にも変化があったことが考えられる。

(2) 勤労観・職業観から見た6つの力の変容について

パーソナルスキルチェックにおいても、研究当初と比べて、僅かだが、えがく力・楽しむ力が上がった(図9)。

授業では、「フルタイムで仕事をしながら、野球をしたい」と自分の言葉で答えたことから、自分らしい豊かな生活をイメージできたことが分かる(図10)。また、いくつかの例を挙げ、働く力はあるものの、マナー・常識・コミュニケーションがとれずに、だんだん職場で居心地が悪くなり、仕事が嫌だな、と感じてしまうケースに対して、「ちゃんと仕事をしているのに」と驚いた様子だったが、「でも、注意されたら直さないといけない」と謙虚で素直な気持ちで考えることができていたことから、前向きな気持ちで社会参加しようとしていることが分かった。具体的な対応方法として、解決できそうにないことがあれば、上司や家の人に相談することを確認した。さらに、これからの自分をイメージする場面においては、「高校で寮生活を送り、就業のための学習と、友達との出会いを楽しみにしている」こと、そして老後に関しても、「元気な病気をしないボランティアやスポーツをしているおじいちゃんになりたい」とイメージすることができた(本時の展開 ワークシート)。

以上のことから、障害がある生徒に向け、肯定的な自己受容ができることや、主体的に進路を決定し、社会参加を育むための進路支援プログラムを作成し、生徒が自分の得意・不得意を知り、将来の様々な生き方について学ぶことによって、社会に参加しようとする態度が育まれてきたと考えられる。

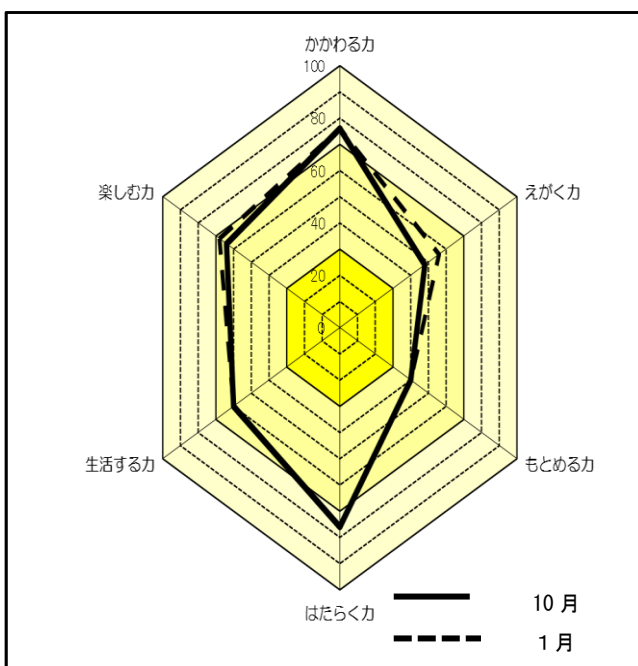


図9 パーソナルスキルチェックの変化



図10 生徒の感想

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 生徒の実態把握で、4つの調査を行うことにより、客観的で多面的な実態把握ができた。
- (2) 知的障害がある生徒に向けた「進路支援プログラム」を作成し、実践することができた。
- (3) 自己理解の指導において、肯定的に自分を受容することが、自己肯定感を高める上で有効であった。
- (4) 生徒自身が自分なりの豊かな生き方・自分らしい生き方について考える場を設定することによって、前向きな気持ちで自分の将来をイメージできた。
- (5) 保護者と連携を図りながら、進路支援を進めていくことできた。

2 課題

- (1) 生徒の実態や成長段階に合わせた、長期的な支援プログラムが必要である。
- (2) 本校のキャリア教育重点目標と整合性を図り、支援を進めていく。

〈参考文献〉

- A. H. マズロー著、小口忠彦訳 『人間性の心理学-モチベーションとパーソナリティー』 産能大出版部
香川邦夫著 2015 『分かりやすい自立活動の領域の捉え方と実践』 教育出版
渡辺昭宏著 2015 『自立活動の授業 de ライフキャリア教育』 明治図書
渡辺昭宏著 2013 『みんなのライフキャリア教育』 明治図書
著作 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所 2010 『障害のある子供の教育相談マニュアル』 ジアース教育新社

〈参考 URL〉

- 「福岡市特別支援教育推進プラン（福岡いきいきチャレンジプラン）」（2015/12/9 アクセス）
<http://www.fuku-c.ed.jp/schoolhp/hattatuc/4kenkyu/kiyou/3A3.pdf>
「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるためのQ&A」 東京都教育委員会（2015/11/15 アクセス）
http://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h23/materials/h23_mat01a_01.pdf
「群馬県総合教育センター」（2015/11/15 アクセス）
http://www.center.gsn.ed.jp/soudan/soudan_csq.html
「独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所」（2015/11/9 アクセス）
<https://www.nise.go.jp/blog/2010/03/icficyfaq.html>
「ICF-CY Japan Network」（2015/10/15 アクセス）
http://www.icficy-jpn.org/wp/?page_id=12